



発行日 = 2003 年 10 月 25 日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・平岩洋介  
照明探偵団・事務局 〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼彩子)  
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail=tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

# 照明探偵団通信

vol.17 Shomei Tanteidan Tsu-shin

照明探偵団倶楽部活動 1  
Transnational Tanteidan Forum 2003  
in Stockholm 報告

海外調査レポート 1  
「あかりのルーツを求めて」  
～スウェーデン・ストックホルム～  
～デンマーク・コペンハーゲン～

海外調査レポート 2  
「漆黒の闇と光」  
～インドネシア・バリ島 ウブド～

照明探偵団倶楽部活動 2  
街歩き報告 (大江戸温泉物語)

照明探偵団倶楽部活動 3  
研究会サロン (8/11) 報告

照明探偵団員レポート  
「ロンドン照明探偵」

面出の探偵ノート

照明探偵団日記



コペンハーゲン チボリ公園

# Transnational Tanteidan Forum 2003 in Stockholm 開催！

スウェーデン・ストックホルム

2003年08月29日

昨年の東京に引き続き第2回目を迎えた今年のTransnational Tanteidan Forum。今回は美しいストックホルムの会場で住宅照明をテーマに行われました。6ヶ国のコアメンバーからのプレゼンテーションも各国事情がよくわかる、見て・聞いて楽しいフォーラムに。

## ■ワールドワイドな“TANTEIDAN”活動へ

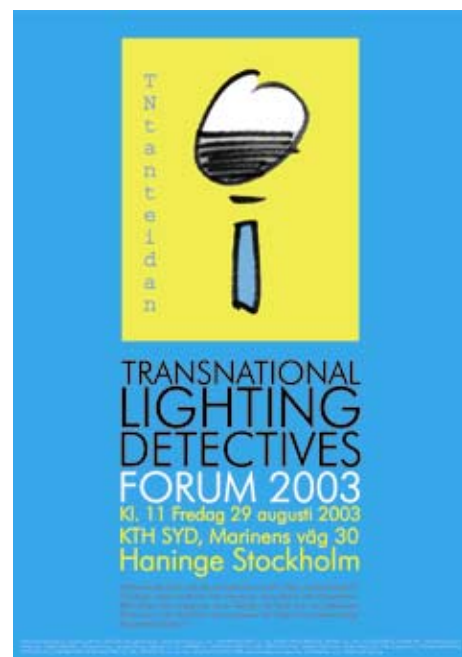
昨年東京で行われた初めてのフォーラムに続き、今年はストックホルムで第2回目のフォーラムが行われた。“Transnational”とは“国境を越えた”、“多国籍の”という意味。1990年にスタートした照明探偵団も年々国際化が進み、世界中から「私も参加したい！」という声が聞かれるようになった。1999年には東京とハンブルグで協力してTransnational Tanteidanのサイトを立ち上げ、ウェブ上での情報交換を開始。

そして、昨年のキックオフとなったフォーラムでは6ヶ国からコアメンバーを集めて、それぞれが住む都市の照明についてディスカッションを行った。昨年はテーマが都市照明、建築照明、住宅照明、イベント照明と多岐に渡って欲張った内容だったため、話の焦点が見えにくかったが、今年は“Residential Neighborhood Lighting”（住宅近隣照明）ということにテーマを絞ったので、各国の住宅照明に対する考え方や捉え方の違いが細部まで浮き彫りになって、結果的にはとても面白い内容になった。

## ■コアメンバーミーティング

現在 Transnational Tanteidan は 6ヶ国 11名のコアメンバーを中心に、1年に1回のペースで予定されているフォーラムやホームページの企画・運営を行っている。フォーラム前日にはコアメンバーがストックホルム支部の Aleksandra 邸に集まりアットホームなミーティングを行った。メール以外に顔を合わせて話ができるのは1年に一度のこの機会だけ。そのため、フォーラム当日の打ち合わせをするだけでなく、手際よくたくさん議題について話し合う必要があった。

事前にメールで流しておいた議題について、それぞれの意見を出し合う。明日にフォーラムを控えているのに、来年のフォーラムのテーマはどうする？、予定している出版の内容は？、ウェブのアップデートの方法はどうか？、というようなことを矢継ぎ早に話し合った。やはりメールでの百回のやり取りより顔を見て話す5分の貴重さを実感。山積みの議題をどうにか一通りこなして、夕方になってやっとストックホルムの街歩きにかけた。



今回のフォーラムのために用意されたポスター



フォーラム前日に打ち合わせをするコアメンバー



会場となった Haninge Centrum 外観





各国プレゼンテーション後のディスカッション風景

### ■ Transnational Tanteidan Forum 2003 in Stockholm

フォーラム当日。当初予定していた人数を大幅に上回る 200 名近くもの参加者となったため、会場は予定していた会場から直前に Kulturhuset Haninge に変更となっていた。ストックホルム市内から 30 分ほど電車で揺られると、文字通り森と湖に囲まれた会場に到着。いかにも北欧モダンな会場が、すでに初秋のストックホルムのきりりとした空気と青空の下、とても美しかった。

バタバタと準備をすること数時間、どうにかパワーポイントのセッティングなども完了していざフォーラム本番。

私から照明探偵団のこれまでの活動紹介をした後に、面出さんから東京の住宅照明について現状や歴史の変遷、住宅照明についてのアンケート調査結果などがたくさんの事例写真とともに紹介された。部屋の天井の真ん中に取り付けられた白々しい蛍光灯シーリングライトや量販店で煌々と点灯して売られる照明器具には会場から笑い声も。やっぱり客観的に見ても見なくても、この日本の住宅照明はおかしいのだろう、と少し落ち込む。ハンブルグからは照明デザイナー Ulrike Brandt

は昼夜の室内の違いをいくつかのサンプルを交えて説明。適光適所が実現されているのがよくわかる。コペンハーゲン王立アカデミーで教えている Katja Bulow からは、デンマークの照明の歴史とそのまま言い換えても過言では無いようなルイス・ポールセンの照明器具を中心にした紹介がなされる。LPA シンガポールの葛西さんは北欧の薄暗い写真とのコントラストで、一層太陽の強さが際立つトロピカルな自然光が取り入れられた住宅の例を紹介。集合住宅の共用廊下に白色蛍光灯の並ぶ写真には妙な共感を覚えてしまった。続いてアメリカの住宅照明について、ワシントンの照明デザイナー Jason Neches からの巧みなエンターテイメントプレゼンテーション。ファーストフードに準えて McMansion と呼ばれているのは郊外型の建売住宅。やっぱりどこの国でも意志を持たないことには、そう簡単に美しい照明とともに暮らせないようだ。最後にストックホルムの照明デザイナーで今回のフォーラムのコーディネーターも努めた Aleksandra Stratimirovic。美しいキャンドルは何も特別な日のためにあるものではなく、日常的に使われている。“スウェーデンの住宅では光の密度が薄い”、というコメントが印象的だった。

プレゼンテーション後には、面出さん、KTH Syd 照明研究所の Jan Ejed 教授にストックホルムの照明団体 “Ljusforum” の代表も加わってのパネルディスカッション。その後の質問タイムには途切れることなく積極的な質問や意見が飛び交った。参加者が一聴衆では無く、自分もパネラーの一人、というぐらいの意気込みで参加していることに驚き、“Tanteidan” という言葉を遠く離れた北欧の国で人々が発しているのを自分の耳で聞いて、嬉しく思った。

### ■ 2004 年はハンブルグで

来年の第 3 回目フォーラムはハンブルグで行われる予定になっていて、既に来年に向けた準備がスタートしている。Transnational Tanteidan としてはまだ初めの一步を踏み出したに過ぎないけれど、様々な国の人が参加するからこそ味わえる数々のハプニングを楽しみながらこれからも活動していきたいと思う。制作途中ですが、ホームページも少しずつアップデートして形になりつつあるので、是非一度チェックしてみてください。

<http://www.tanteidan.org> (田沼 彩子)



会場には約 200 名の聴衆が集まった



コアメンバーと日本からの参加メンバーで記念撮影

# 北欧・あかりのルーツを求めて

スウェーデン・ストックホルム、デンマーク・コペンハーゲン

2003.08.27 - 09.05

早川 亜紀 + 田沼 彩子

東京では残暑厳しい季節、短い夏を終え秋支度の始まる北欧を訪ねました。白夜の夏、厳しい寒さと闇に閉ざされる冬という独特な環境の北欧では、あかりとの付き合い方が私たちとは異なります。そこに根ざすあかりの文化に触れるため、ストックホルムやコペンハーゲンを中心に調査してきました。

## ■スウェーデンの窓辺のあかり

夜ストックホルムに到着し、ホテルへ向かうタクシーから見た景色の中で一番初めに印象に残ったのが窓辺の明かりでした。スタンドライトやキャンドルライトが多くの窓辺に置かれています。その光景が美しく暖かな印象を与るので、「窓辺のあかり=人を迎えるあかり」のような意味のあるものなのだろうと感心して眺めていました。しかし、後に彼らにその目的を訊くと「さあ？昔からそうして窓辺を飾っているから。」というような答えが返ってきました。確かにどの窓辺にも、あかりに限らず鉢植えやオブジェなどが飾られており、スウェーデンでは窓辺をデコレーションすることが文化として根ざしているようです。彼らがそこに用いているスタンドライトやキャンドルライトは少し背の高いもので（20～30cm程度）サッシのデザインとのバランスが良く、室内にも外から見える景色にも、やわらかで暖かな雰囲気を提供していました。

また、クリスマスの窓辺のあかりは特にスゴイとのこと。4本のキャンドルを立てるクリスマス用のスタンドに、1ヶ月前から1週間に1本ずつキャンドルを点燈してゆきます。自然と長さの異なる4本のキャンドルができ、クリスマスの夜にはそのあかりが全ての家々の窓辺を埋め尽くすそうです。

## ■キャンドルライト

北欧を訪れて驚いたことの一つは、キャンドルが非常に多く用いられていることです。



窓辺のあかり。白熱灯を使っている家が主流。

私たちがいくつかキャンドルスタンドは持っていますし、時には火を灯して雰囲気を楽しんだりもします。しかし彼らのそれは生活や暮らしに深く根ざしており、決して特別なものではありません。家だけでなく、ホテルやレストランやお店など、思わず火事の心配をしてしまうほどいたるところに灯されています。もちろんそういった問題もあるそうですが火災報知機を取付けたりするなどして（ポータブルなものもあるらしい）安全には配慮しているとのこと。そうは言っても日本ではなかなか許される使われ方、物量ではないでしょう。

興味深かったのは、マッチがスーパーのランプ販売コーナーに売られていたことです。

日本ではキッチン雑貨や喫煙雑貨として置かれていることが多いのではないのでしょうか。彼らにとって炎は「あかり」「光源」として自然に認識されているのです。

また、スウェーデンとデンマークは県境ほどに近く私たちは「北欧の国」とひとくくりにしてしまいがちですが、あかりの文化は異なるのだと感じました。スウェーデンは前述の通り少し背のあるキャンドルが普及しており、一方スウェーデンほど窓辺をデコレーションしないデンマークでは、テーブルや棚、コーナーなどに低くて小さなキャンドル（ティーキャンドル）を数個並べる使い方が多かったように思います。



スーパーのランプ販売コーナーに置かれているマッチ



テーブル上のキャンドル（コペンハーゲンの住宅にて）



スウェーデンのキャンドルライト（右から3つ目がクリスマス用）



### ■ボートハウス

今回の調査で北欧のあかりの文化に触れるべく計7件のお宅を拝見させていただいたのですが、特におもしろかったのがボートハウスです。住人は建築家のご家族でしたが、もとは貨物運搬に使用されていたボートが住居用に改造されたものを譲り受けて、現在コペンハーゲンの街中の運河に停留させて住んでいます。間取りは基本的に広いワンルーム。キッチン・ダイニング・リビング・ワークスペースがあり、仕切りの向こうにベッドや子供部屋があります。全体的に非常にオープンなつくりと雰囲気でした。

ボートハウスの特筆すべき光環境は、デイライトの美しさにあります。船舶独特の丸窓から北欧の低い太陽がさしこみ、室内をゆっくりと時間をかけて移動してゆきます。また、水面を反射して天井に揺らいで映りこむ光を、子供たちは映画でも観るように飽きずに眺めていたりするとのこと。ボートをどこに停留させるか、どの向きに停留させるか、によって全く異なるデイライトを楽しめるのです。彼らもこのボートに住み始めて14年、より良い場所を求めて現住所は3ヶ所目だということです。訪ねたのは夕暮れ時でしたが、青いデイライトと人工光のコントラストはたいへん美しいものでした。

### ■電球色セブンイレブン

闇に閉ざされ厳しい寒さの冬が訪れる北欧の国々には、暖かい光の文化が根ざしています。キャンドルライトの使われ方を紹介しましたが、一般的な屋内照明器具に使われる光源も日本と比べて白熱ランプを使用している例が圧倒的に多く見られました。日本では照度や省エネルギーなどが光環境を考える上で無視できない重要な要素なのに対して、彼らにとっては暖かな雰囲気づくりというのが、その気候風土の中暮らしてゆく上で感覚的に欠かすことのできない、最もプライオリティの高い要素なのでしょう。

ストックホルムにもコペンハーゲンにもたくさん普及していたセブンイレブンは、当然のように低い色温度でつくられており街の景色にも馴染んでいました。電球色の蛍光灯にハロゲンのスポットライト。ペンダントによるアッパーライトで間接光をとっている店もありました。真っ白い光で満たされた日本のセブンイレブンとは全くの別物といった雰囲気です。余談ですが、デンマークセブンイレブンのデンリッシュペーストはさすがに本場だけあって安くて美味しいです。訪れた際にはぜひお試しを。(早川 亜紀)



ボートハウス



電球色のセブンイレブン



ストックホルムの夜景

# バリ島・リゾートホテル 漆黒の闇と光

インドネシア・バリ島 ウブド

2003. 07. 23 - 27

森 秀人 + 田中 謙太郎

最近、雑誌などで多く取り上げられている「アジアリゾート」。これらは美しい写真で綴られ、読者を非日常的な空間へと導いてくれる。その中で光は重要な役割を担っている。では実際にどのようなニクイ演出が施されているのか？心が癒される光を調査すべく赤道を越えて南国バリへ向かった。

## ■神々の島

今回の調査地を選んだバリ島は、インドネシアを構成する島の1つで、ジャワ島とロンボク島の間に位置する。インドネシアはオランダ、イギリス、日本などの占領地・植民地という歴史を経て、1949年にスカルノ大統領により独立を果たす。イスラム教徒が大多数を占める中で、ヒンドゥー教を核とするバリは、その独自の文化芸能をいかに保持してという問題に対し、国は当時から行ってきた宗教政策に沿って教義や祭司制度の整備を進め義務教育の中で教え広めてきた。1970年以降、バリ島はインドネシア随一の国際的観光地としての役割を担い、外貨獲得を目的とした積極的な観光客の誘致政策がとられてきた。バリの人も自身も観光客が何を求めてやってくるかを充分意識しており、各村々で毎日のように披露されている舞踊や儀式、祭りなどは昔ながら…と言うよりは観光のためにかなりアレンジが加わったものである。

そんな中、旅行者の拠点となる宿泊施設に関しても大きく変わってきた。10年ほど前に訪れた時は、外貨を持ってくる旅行者目当てに物売りやたちの悪いガイドなどが必要に付きまとい観光客を取り囲むと言った感じであったが、政府の進めで物売りや客引きなどの行為を規制し、ホテルなどで働く人の為の国立学校（実践ホテルを同時経営）を造り、ホテル従業員の指導に躍起になった。これらの動きに合わせてリゾートホテルの数が急増し、ホテル内のサービスも向上してきたのである。



ヴィラ間の通路にはわずかなあかりが並ぶ



暗闇と静けさの中に灯る炎が印象的なエントランス

## ■漆黒の闇

日本を午後に出発し、その日の午後8時を過ぎた頃に現地（バリ島・ングラライ空港）に到着した。空港を出ると想像していたよりも涼しいことに驚かされる。到着窓口の外には旅行客を待ち構えるトラベルエージェントや怪しい感じのガイドの中から自分の名前をもったエージェントを見つけ出し、まずはホテルまで車で移動することになる。今回の予定は現地に3泊4日。宿泊先はウブドの「フォーシーズンズ・リゾート・バリ・アット・サヤン」と「アマダリ」の2箇所。周辺には本格派リゾートホテルが多く建ち並んでいる。空港から走り始めて30分くらいすると徐々に街灯の明かりが減り、時折、闇の中に現れる村々の集会場の灯りに目を引かれる。更に進むと街灯は一切無くなり、車のヘッドライトに照らし出される路面を見つめるだけとなった。まさに「漆黒の闇」といった感じである。さらに20分ほど走ると車は急に速度を下げ、竹藪の中に左折し森の中へ入っていった。するとそこには闇の中で小さく揺らめく炎が僕たちを出迎えてくれた。そこが「フォーシーズンズ・リゾート・バリ・アット・サヤン」のメインエントランスであった。漆黒の闇の中、質素にさえ

感じるこの明かりが逆に本物のリゾートであることを感じさせてくれた。

「フォーシーズンズ・リゾート・バリ・アット・サヤン」はウブド独特の地形を生かした造りで、敷地内も夜間には通路から外れないようにわずかな明かりだけが施されている。照明器具はシンプルなもので、壺の中に入れられたものや簡単に壁の中に埋め込まれたものなど自然の中で目立たないように設置されている。全てがウブドの自然の景観を崩さないように控えめに計画され、ゲストをさりげなくもてなしている。肝心のゲストルームは、プライベートを保てるようにヴィラ形式がとられており、室内の照明も必要最低限で過剰なものは一切無い。リビングは壁が無く外と一体となった南国ならではの空間を創り上げている。ベッセルームはリゾートホテルのお約束である「天蓋・スクリーン」つきで上部に設けられた間接照明の明かりがスクリーンを通して柔らかく室内に漏れている。一通り撮影を済ませ、腰を落ち着けてくつろいでみると辺りの動植物の鳴き声や川の流れる音が心地よく耳に入ってくる。心が自然とゆっくりとしたリズムに溶け込んでいった。